

[特別記事]

「日本語用論学会 10 年の歩み」*

澤田治美・余 維

関西外国語大学

1. はじめに

日本語用論学会は、2009 年 12 月の大会が第 12 回大会となり、発足 12 年目を迎えた。第 1 回大会は 1998 年 12 月に関西外国語大学片鉾学舎で開催され、2007 年 12 月に関西外国語大学中宮学舎で第 10 回記念大会が開催された。この 10 年間の活動内容をまとめ、かつ、大会における研究発表や学会誌『語用論研究』の内容をジャンル別に分類しておくことは、今後の学会の発展にとって意義あることと考えられる。そこで、若干のエピソードを交えつつ、「日本語用論学会 10 年の歩み」と題してまとめた次第である。

2. 学会設立と組織の変遷

2.1. 学会設立

当時、関西外国語大学国際言語学部・教授であられた小泉保先生から、「語用論学会を設立しようと考えているところですが、手伝ってくれませんか」というお話があったのは、1997 年の 6 月頃のことであった。小泉先生は『言外の言語学——日本語語用論』（1990、三省堂）を出版され、語用論や認知言語学の学会組織の必要性を痛感しておられたようである。また、1993 年の第 4 回国際語用論学会が神戸で開かれたことも大きな刺激となっていたことは想像に難くない。

その後、京都駅近くのレストランで、有志が参集した。小泉保、高原脩、山梨正明、林宅男、林礼子、澤田治美の各氏であった。その席では、語用論学会のイメージや各自の専

* 本稿をまとめるに際して、有益なご示唆・ご教示をいただいた林宅男、林礼子委員、ならびに、貴重な写真を提供していただいた関西外国語大学・広報室に深く感謝する次第である。

門分野などを話し合い、談論風発、きわめて楽しい会であった。

その後、計画は順調に進展し、第 1 回運営委員会を、1998 年 5 月 16 日（土）、ホテル京阪の「美濃吉」で開き、次の議題を討議した。

- (1) 設立趣意書について
- (2) 規約について（正式名称を「日本語用論学会」(The Pragmatics Society of Japan) とする)
- (3) 第 1 回大会について（1998 年 12 月 5 日（土）、関西外国語大学で開催する）
- (4) 研究発表、大会プログラムについて（委員はすべての応募原稿を査読する）

第 2 回運営委員会を、1998 年 7 月 23 日（木）、ホテル京阪の「美濃吉」で開き、次の議題を討議した。

- (1) 発起人について
- (2) 会費と会員の種類について
- (3) 職務の担当について
- (4) 研究発表応募原稿の審査について
- (5) 第 1 回大会プログラムの枠組み作りについて

第 3 回運営委員会を、1998 年 9 月 10 日（木）、龍谷大学「紫英館」で開き、次の議題を討議した。

- (1) 発起人の追加について
- (2) 運営委員の追加について
- (3) 第 1 回大会研究発表者選考について
- (4) 研究発表応募原稿の審査について
- (5) 第 1 回大会プログラムの決定について
- (6) 予稿集について
- (7) 役割分担について

第 4 回運営委員会を、1998 年 11 月 14 日（土）、龍谷大学「紫英館」で開き、次の議題を討議した。

- (1) 投稿規定について
- (2) 第 2 回大会について（1999 年 12 月 4 日、立命館大学で開催する）
- (3) 第 2 回大会におけるシンポジウムについて

また、第 1 回大会のために、林宅男教授による手製の美しい大会ポスターが特別に作成された。

第5回運営委員会を、1998年12月5日(土)、関西外国語大学本館会議室で開き、次の議題を討議した。

- (1) 規約の確認について
- (2) 投稿規定について
- (3) 予稿集『プログラム・アンド・アブストラクツ』について
- (4) 会計監査について
- (5) 第2回大会について
- (6) 予算について
- (7) 役割分担について

会議は非常に家族的な雰囲気で行われたが、この雰囲気は今でもわが学会の伝統となって息づいているように思われる。

「設立趣意書」(小泉保先生作)と「設立発起人」は以下の通りである。

設立趣意書

言語記号は音声表現と意味内容が恣意的に結合したものであるという F. D. ソシュールの規定から現代言語学がスタートしました。したがって、音声部門から出発し意味部門に帰着するのが言語研究の常道と見なされるようになりました。20世紀前半に始まった音声極における探求は構造言語学により音韻論として結実しましたが、意味極への考察は等閑視されました。しかし、20世紀も後半に入ると生成文法に触発されて意味面における開拓が活発となり、意味の成分分析という形で進展し、やがて生成意味論や概念意味論などの手により意味構造の解明がはかどってきました。

発話の意味は、その発話の場面を考慮に入れない限り、解釈不可能になるケースが数多くあります。いや、発話をその状況において意味分析してこそ「生きたことば」の実相を明らかにすることができるのです。

すでに、J. L. オースティンや J. R. サールなどの主張する発話行為を通して「ことばの力」が認識され、H. P. グライスの指摘により含意の威力、すなわち「言外の意味」が注目されるようになりました。ここに、「語用論」は言語学の一部門として、S. C. レビンソンなどにより体系化が推し進められました。さらに、語用論の分析手法を用いて皮肉や比喩を含む文学の分野への追求も可能となり、談話分析や会話分析によりそれらのルールを探り出す作業も着実に行われています。

広い視野に立てば、語用論の研究は意味論、統語論、社会言語学、心理言語学、認知言語学それに日本語を始めとするさまざまな語学教育などの活動が交差する領域を占め、

21 世紀へ向けての展望は洋々たるものがあります。

とくに、1993 年には第 4 回国際語用論会議が神戸で盛大に開催され、語用論に対する認識と理解が深まり、語用論研究はますます盛んになってきています。そこで、語用論を中心テーマとする発表と研究の場を作らなければならないと考えています。すなわち、日本における語用論の研究を組織化して、研究者相互の修練と若い研究者の育成を目指し、研究発表と機関誌を通して学理の充実と拡大、および国外研究団体との交流を促進するため「日本語用論学会」の設立を呼びかける次第であります。この趣旨をご理解の上、ご参加下さるようお願いいたします。

1998 年 10 月

設立発起人

林 宅男	林 礼子	東森 勲	井出 祥子	飯田 仁	今井 邦彦
井上 逸兵	笥 壽雄	神尾 昭雄	河上 誓作	金水 敏	児玉 徳美
小泉 保	小西 友七	久保 進	国広 哲弥	中村 芳久	中右 実
成田 義光	西光 義弘	西山 佑司	大沼 雅彦	坂原 茂	澤田 治美
柴谷 方良	杉本 孝司	田頭 良子	高原 脩	高司 正夫	土屋 俊
内田 聖二	上田 功	山梨 正明	矢野 安剛	安井 稔	余 維

(ABC 順)

さらに、数度の委員会を開いて、「第 1 回日本語用論学会」の開催の要領（研究発表者、記念講演者含む）を決定した。また、学会当日に参加者に配布する大会予稿集『プログラム・アンド・アブストラクツ』を編集・印刷することになった。

2.2. 記念すべき第 1 回大会



(第一回大会小泉保会長による
記念講演)

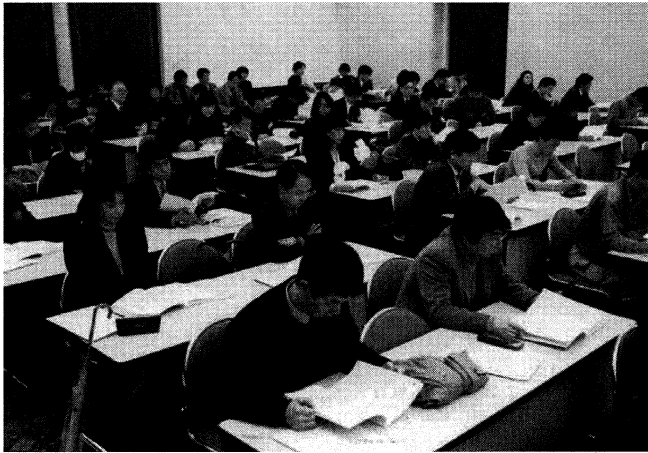
記念すべき第 1 回大会は、1998 年 12 月 5 日（土）、関西外国語大学で開催された。あいにくの小雨にもかかわらず、参加者は 180 人以上にのぼり、語用論に対する関心の高さがうかがえる大会となった。午後 1 時からコンベンションホールで第 1 回総会が開かれ、神戸市外国語大学・高原脩教授による開会の辞のあと、開催校を代表して、谷本貞人理事長・学長からあいさつがあった。つづいて、議事の審議に入り、学会規約、会長、事務局長をはじめとする役員人事、会計監査委員の人事などが承認された。会長として小泉保教授が選ばれた。

午後 2 時から、コンベンションホール、多目的ホー

ル、本館5階の3会場に分かれて、各会場5件、計15件の研究発表が行われた。3時から「川柳の語用論」と題して、小泉保教授による記念講演があった。川柳の笑いを語用論的な観点から分析したものであった。

大会終了後、谷本国際文化センターで懇親会が催された。学会の誕生を祝って、多くの参加者があり、終始なごやかな会となった。次回の大会は立命館大学で開催することになった。

なお、1993年3月時点で会員数は105名であり、学会誌『語用論研究』の創刊は1999年12月4日であった。



(第一回大会での参加者の様子)

2.3. 10周年記念世界大会

第10回大会は、2007年12月8日(土)、9日(日)に「10周年記念世界大会」と銘打って、関西外国語大学で開催された。この大会の趣旨は、学会発足10周年を記念して、できるだけ多くの発表者・参加者を募ること、また海外から可能な限り多くの参加者を募ることによって、学会を国際化することであった。林宅男事務局長のご尽力によって、海外からの発表を積極的に呼びかけたところ、英語による発表は、外国からの応募31件を含む47件、日本語による発表は55件、計102件と、前年の3倍近い応募があった。なお、海外からは、アジア諸国からだけでなく、遠く、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパの他、アフリカからの応募もあった。また、大会予稿集は日英両語で書かれた。大会の前夜、ゲストスピーカーを招いて歓迎会を開催し、親交を深めた。

初日は午前10時からの開会式でスタートした。基調講演者、招待講演者、シンポジウムパネリスト、運営委員、一般参加者などが集い、開催校挨拶(谷本義高学長)、会長挨拶(澤田治美会長)などがあった。その後、10時40分から12時まで、“Text and Context Revisited: Thirty Years Later”と題するTeun A. van Dijk教授の「基調講演1」があった。午後は、ワークショップ14件(4室)、ポスター発表6件、研究発表29件(英語による

発表 5 室を含む 8 室)があった。

二日目の午前中は、研究発表 33 件（英語による発表 5 室を含む 9 室）、及び、11 時 40 分から 13 時 10 分まで、“Context and Structure in a Theory of Pragmatics”と題する Jef Verschueren 教授の「基調講演 2」があった。午後は、14 時から 15 時 30 分まで、“On Memes and Memetics in Language”と題する Ziran He（何自然）教授の「基調講演 3」があった。続いて、シンポジウム（テーマ：‘Pragmatics in a Wider Perspective’、講師：池上嘉彦教授、井出祥子教授、Verschueren 教授、コメンテーター：He（何）教授）が開かれた。この大会は、ワークショップ、ポスター発表、日本語による研究発表、英語による研究発表、基調講演、シンポジウム、という盛りだくさんのプログラムから成っていたが、参加者の国籍からしても、読まれた論文の質と量からしても、画期的な大会となった。参加者（発表者を含む）は、一般 172 名、学生 85 名で、合計 257 名にのぼった。

基調講演者として、海外から Tuen A. van Dijk（スペイン）、Jef Verschueren（ベルギー）、Ziran He（何自然）（中国）という一流の語用論学者を招き、じかに話を聴く機会に恵まれたことは、私たちにとって大きな刺激となった。学会が一步一步国際化されつつあることを肌で感じた方々も多かったのではなかろうか。2 日間の開催、会場準備、海外からのゲストスピーカーのお世話（滞在や送迎など）などで多忙を極めたが、得られたものはそれ以上に大きかった。



（第 10 回記念世界大会 シンポジウム [左から司会の西光義光、講師の池上嘉彦、井出祥子、Jef Verschueren、コメンテーターの Ziran He（何自然）の各氏]）

2.4. 組織の変遷と事業の拡大

2.4.1. 規約の改正

1998 年 12 月 5 日（土）第 1 回総会で承認された役員体制は次の通りであった。

会長： 小泉保
編集委員長： 児玉徳美

編集委員： 内田聖二、金水敏、東森勲、山梨正明
渉外委員： 高原脩、神尾昭雄、久保進
企画委員： 西光義弘、杉本孝司
事務局長： 澤田治美
事務局長補佐： 高司正夫
庶務： 林宅男
会計： 林礼子
会計監査： 加藤克美



(学会発足当初の役員)

2003年12月に規約改正をして、事務局、編集委員会、大会運営委員会（大会企画と大会実行に分かれる）、事業委員会、広報委員会の5つの組織に分け、それぞれに委員長を配して責任の分担を明確にすることとなった。この体制は2004年4月から実行に移された。この改正について、小泉会長は『ニューズレター』（No.11）（2004年5月発行）の中で、「日本語用論学会も、ようやく種まき、田植えの春耕を終えたと思います。これから炎天下の草取りが始まります。こうした夏季の労苦の先に収穫の秋が期待されるわけです。」と述べておられる。

2.4.2. 事業委員会の活動

本学会の特色の一つに、事業委員会の企画による活発な活動がある。主な活動として、「談話会」、「講演会」、「研究会グループ（SIG）」の支援がある。

2.4.2.1. 談話会

談話会は「毎回1～2名の講師をお招きして最近のご研究について講演をしていただき、その後、ディスカッションを通して、それぞれの分野の理解を深めることを目的としてお

こなうものです」と説明されている。第1回は、2005年7月2日、関西大学（千里山キャンパス、岩崎記念館多目的ホール1）において、「モダリティ」と題して開かれた。講師は、仁田義雄（大阪外国語大学）と澤田治美（関西外国語大学）の両氏であった。それ以来、今までに計6回開かれた（各回のテーマに関しては3.2節を参照）。

2.4.2.2. 講演会

講演会は、不定期ではあるが着実に継続されて、会員だけでなく会員以外の人たちにとって大きな刺激となっている。第1回は、2006年12月9日（日）、桃山学院大学において“Evolving Discourse: Speech Acts and Sequentiality”と題して開かれた。講師は、Professor Emeritus & Dr. Jacob L. Mey (University of Southern Denmark) であった。それ以来、今まで計3回開かれた（各回のテーマに関しては3.3節を参照）。

2.4.2.3. 研究会グループ (SIG)

研究会グループ (SIG) は、2007年度の4月からスタートした。会の趣旨は以下の通りである。「本学会では、学会のより一層の活性化と語用論研究の発展、及び、語用論研究者の相互交流を図るべく、語用論の下位分野および関連分野における研究会グループ (SIG) の発足を呼びかけることになりました。この研究会では、個別の研究テーマを設定し、それぞれの内容と、事情に合わせて、読書会、研究発表、共同研究などの活動を行うものです。研究会の内容は、語用論に関係するものであれば、どのようなものでも構いませんが、出来るだけ、その目的がはっきりしたものを歓迎します（例：関連性理論、ポライトネス、モダリティ、歴史的語用論、ダイクシス、テキスト語用論、ナラティブ、会話分析 (CA)、批判的談話分析 (CDA)、認知語用論、第2言語習得語用論、談話文法、談話管理研究）。また、メンバーの構成も本学会の会員が主たる構成員であれば、非会員の参加も認めます」。

SIG 研究会は、現在「モダリティ研究会」、「話し言葉の研究会」、「関連性理論研究会」の3つの会が活動中である。「モダリティ研究会」と「話し言葉の研究会」は、2007年4月に発足し、一期目を2009年3月に終了して、現在2期目に入っている。「関連性理論研究会」は、2008年4月に発足し、現在1期目である（2007年（「話し言葉」）と2008年（「モダリティ」と「関連性」）には全国大会のワークショップでその研究成果が発表された）。

3. 学会 10 年間の活動の軌跡

以下、学会発足の年1998年12月から翌2008年3月までの10年間の活動の概要を具体的に跡付けていくことにする。

3.1. 年次大会の講演及びシンポジウム

各年次大会の講演およびシンポジウムは以下の通りである。

	開催日	開催場所
第1回	1998.12.5	関西外国語大学
第2回	1999.12.4	立命館大学
第3回	2000.12.2	神戸研究学園都市 大学交流センター
第4回	2001.12.1	桃山学院大学
第5回	2002.12.7	関西外国語大学
第6回	2003.12.6	神奈川大学
第7回	2004.12.11	甲南女子大学
第8回	2005.12.10	京都大学
第9回	2006.12.9	桃山学院大学
第10回	2007.12.8-9	関西外国語大学

第1回大会（1998.12.5 関西外国語大学）

記念講演：「川柳の語用論」（小泉保）

この講演では、「川柳」の具体的な分析を通して、「笑い」や「背景」といった川柳独自の語用論的機能が興味深い形で明らかにされた。

第2回大会（1999.12.4 立命館大学）

シンポジウム：「語用論のダイナミズム——21世紀への知の探求——」

1. 語用論のダイナミズム（山梨正明）
2. 異文化コミュニケーションの研究と解釈的アプローチ（井上逸兵）
3. 動的な言語観と一語発話の言語運用（飯田仁）

このシンポジウムでは、言語哲学、異文化間コミュニケーション、自然言語処理の3つの研究視点から、21世紀に向けて語用論研究の新しい可能性が模索された。

第3回大会（2000.12.2 神戸研究学園都市大学交流センター）

シンポジウム：「プロフェッションと語用論——語用論はいかに「場」の行動を分析するか——」

1. はじめに (高原脩)
2. 場面・視点・言語表現 (国広哲弥)
3. 障害を持つ人との会話——重度知的障害、語用論および言機能広汎性発達障害 (大井学)
4. 法的トークの制度的特徴——法律相談場面の会話分析 (榎村志郎)

このシンポジウムでは、言語学、コミュニケーション障害学、法社会学の各場面の事象に見られるいくつかの問題が提起され、語用論の視点から問題解決の可能性と有用性について提言されるとともに、「応用語用論」の可能性が議論された。

第4回大会 (2001.12.1 桃山学院大学)

シンポジウム：「関連性理論との対話」

1. 「関連性理論との対話」——関連性理論は語用論の新しいモデルになりうるか—— (西山佑司)
2. 真の語用論——関連性理論の切れ味—— (今井邦彦)
3. 言語行為論への招待——関連性理論からの批判に答えて—— (久保進)
4. 認知言語学からみた関連性理論の問題点 (中村芳久)

このシンポジウムでは、「関連性理論との対話」というテーマに示されるように、関連性理論が語用論の新しいモデルになりうるかどうかをめぐり、関連性理論、言語行為論、認知言語学の立場から、対話と議論を通して検証された。

第5回大会 (2002.12.7 関西外国語大学)

シンポジウム：「語用論からの提言——語用論から何が提言できるか——」

1. 概要 (高原脩)
2. ジャッケンドフの概念意味論とラネカーの認知文法の伝達に関して (小泉保)
3. GCI をめぐって——新 Grice 学派と関連性理論の比較—— (児玉徳美)
4. モダリティーの多義性と単義性をめぐって——認知言語学的アプローチと関連性理論—— (澤田治美)
5. 「語用論からの提言」に対する認知と関連性理論からのコメント (東森勲)

このシンポジウムでは、「認知」をめぐり有力な言語研究のアプローチとして、概念意味論 (ジャッケンドフ)、認知文法 (ラネカー)、新グライス学派 (ホーン、レヴィンソン)、認知意味論 (スウィーツァーによるモダリティ論) などの研究が紹介され、関連性理論との比較検討を通して、語用論研究のあり方が議論された。

第6回大会 (2003.12.6 神奈川大学)

シンポジウム：「第2言語習得語用論」

1. 総括 (伊藤克敏)
2. 第2言語習得語用論の潮流とこれからの英語教育 (関山健治)
3. 第2言語語用能力習得に与える影響と効果——ポジティブプライトネスの指導を通して—— (村田和代)
4. 英語学習者の個人差と第2言語語用論 (高橋里美)
5. 文化心理学からのコメント (西光義弘)

第2言語習得語用論は外国語学習者の語用論的能力に関する研究であり、中間言語語用論、社会言語学、そして応用言語学の学際的研究として、1980年以後、語用論学者と外国語教師の関心を持たれるようになった。このシンポジウムでは、初めて第2言語習得語用論が取り上げられた。

第7回大会 (2004.12.11 甲南女子大学)

シンポジウム：「ジェンダーと語用論——記号論・エスノメソドロジー・批判的談話分析からの提言——」

1. 語用論研究におけるジェンダー (林礼子)
2. 近代フランスにおける「女らしさ」の規範と表象 (小倉孝誠)
3. 言語イデオロギーとしての「女ことば」 (中村桃子)
4. ジェンダーと会話分析——成員カテゴリー化装置としてのジェンダー—— (山崎晶子・山崎敬一)
5. 「言語とジェンダー」研究からのコメント (佐竹久仁子)

シンポジウムは、「ジェンダーと語用論」というテーマのもと、批判的談話分析 (Critical Discourse Analysis) の観点から言語とジェンダーの関係に光が当てられた。

第8回大会 (2005.12.10 京都大学)

シンポジウム：「歴史語用論：その可能性と課題」

1. 日本(語)への発信・日本(語)からの発信 (金水敏)
2. 歴史語用論の成立と射程 (小野寺典子)
3. 英語詩における語用論標識の文法化 (福元広二)
4. 日本語における対者敬語の成立——『古今和歌集』詞書にみる「ハベリ」文法化の過程—— (森山由紀子)

このシンポジウムでは、歴史言語学の研究史と現状、コーパス言語学と歴史語用論の関わり、国語史研究の視点に立った日本語存在動詞「ハベリ」の文法化の過程などを中心として、歴史語用論の課題とその可能性が討議された。

第9回大会 (2006.12.9 桃山学院大学)

特別講演: Evolving Discourse: Speech Acts and Sequentiality (Jacob L. Mey)

会長講演: On Epistemic Modality: A Pragmatic Approach (Harumi Sawada)

これら2つの講演では、それぞれ、語用論は動的で生成発展しつつあるコンテキストの中での談話を研究対象にしなければならないこと、認識的モダリティを語用論的な観点から分析するとどのような成果が得られるか、といったことが論じられた。



(初めて海外から講師を迎えた第9回大会後、近くの居酒屋で談笑 [Jacob L. Mey (大会講師)、澤田治美 (第二代会長)、小泉保 (初代会長) の各氏])

第10回大会 (2007.12.8-9 関西外国語大学) —10周年記念世界大会—

基調講演 1

司会: 林 礼子

講師: Teun A. VAN DIJK

演題: Text and Context Revisited: Thirty Years Later

基調講演 2

司会: 高原 脩

講師: Jef VERSCHUEREN

演題: Context and Structure in a Theory of Pragmatics

基調講演 3

司会: 山梨正明

講師: Ziran HE

演題: On Memes and Memetics in Language

これら3つの講演では、それぞれ、ジェンダーや社会階層などの概念に基づいてコンテキストに関する新しいモデルを構築する必要があること、認識論的に言って、言語構造とコンテキストは表裏一体のものとして捉える必要があること、人間を媒体として増殖する

思想的因子であるミーム (meme) は文化や言語の進化を解明するうえで大きな働きをしていること、が論じられた。

Symposium: Pragmatics in a Wider Perspective

司会： 西光義弘

講師： Yoshihiko IKEGAMI (Showa Women's University / University of Tokyo)

演題： Pragmatics, Semiotics, and Cognitive Linguistics: 'Meaning' as a Triadic Relationship

講師： Sachiko IDE (Japan Women's University)

演題： Emancipatory Pragmatics: How and why It Could Contribute for the Sustainable Global Community

講師： Jef VERSCHUEREN (University of Antwerp)

演題： Pragmatic Steps to an Ecology of the Public Sphere

コメンテーター： Ziran HE (Guangdong University of Foreign Studies)

このシンポジウムでは「より広い視野に立った語用論」と題して、3人のパネリストから、それぞれ、意味分析に際しては多次的な見方をとる必要があること、人間のコミュニケーションの本質を解明するためには地球上の様々な民族の様々な文化をグローバルな視点から考慮する必要があること、そして、語用論は「公的領分の生態学」(ecology of public sphere) に貢献しえること、などが論じられた。そして、パネリストとコメンテーターやフロアとの間で活発な質疑応答が交わされた。

以上挙げた各年次大会における、記念講演、特別講演、基調講演、シンポジウムでの発表は33件にのぼる(冒頭での紹介や発表に対するコメントは除く)。その内容は、推意、言語(発話)行為、モダリティ、関連性理論、ポライトネス、言語習得、社会的語用論(批判的談話分析)、文学語用論、応用語用論、認知言語学的語用論、歴史語用論、語用論の一般理論、コンテキストなど多彩なテーマに関係している。

3.2. 談話会

上述したように、談話会は、毎回1~2名の講師を招き、最近のご研究について講演をしていただき、その後、ディスカッションを通して、それぞれの分野の理解を深めることを目的として行うものである。第1回から第6回までのテーマおよび講師は以下の通りである。

第1回談話会 日時： 2005年7月2日

場所： 関西大学

司会： 高原 脩

演題：「モダリティ」

講師：澤田治美、仁田義雄（大阪外国語大学）

第 2 回談話会 日時：2006 年 3 月 21 日

場所：「キャンパスプラザ京都」

司会：高原 脩

演題：「結合価理論による文の統語分析」

講師：小泉 保

第 3 回談話会 日時：2006 年 7 月 1 日

場所：龍谷大学 大宮キャンパス

司会：高原 脩

演題：「言語学は分析対象をいかに拡大できるか：閉塞状況からの脱出に向けて」

講師：児玉徳美

第 4 回談話会 日時：2007 年 3 月 21 日

場所：「キャンパスプラザ京都」

司会：高原 脩

演題：「認知レトリックと語用論——発話機能と意味の創発性の問題を中心に」

講師：山梨正明

第 5 回談話会 日時：2007 年 7 月 7 日

場所：龍谷大学 大宮キャンパス

司会：高原 脩

演題：“Do Discourse Connectives Connect Discourse?”

講師：Prof. & Dr. Lawrence Schourup（大阪府立大学）

第 6 回談話会 日時：2008 年 3 月 20 日

場所：桃山学院大学 中ノ島サテライト・キャンパス

司会：高原 脩

演題：“Explaining generalizations” in a unified way

講師：中村芳久（金沢大学）

3.3. 講演会

講演会は 2006 年から 2007 年にかけて、国際的に著名な講師を招いて行われ、聴衆に

大きな感銘を与えた。第1回から第3回までの演題および講師は以下の通りである。

第1回講演会

日時： 2006年12月9日（日）

場所： 桃山学院大学（日本語用論学会第9回全国大会期間中）

司会： 西光義弘

演題： “Evolving Discourse: Speech Acts and Sequentiality”

講師： Professor Emeritus & Dr. Jacob L. Mey (University of Southern Denmark)

第2回講演会

日時： 2007年7月29日（日）

場所： 同志社大学

司会： 高司正夫

演題： “No one can flatter so prettily as you do”: Compliments and compliment responses in the history of English

講師： Prof. & Dr. Andreas H. Jucker

第3回講演会

日時： 2007年7月19日（土）

場所： 甲南女子大学

挨拶： 山梨正明

司会： 林 宅男

演題： “Locating Politeness in Interaction”

講師： Prof. & Dr. Gabriele Kasper (University of Hawai'i at Manoa)

3.4. 共催講演会

共催講演会是他学会との共催で開催される講演会である。第1回から第2回までの演題および講師は以下の通りである。

第1回講演、ワークショップ後援（甲南女子大学、エスノメソドロジー・会話分析研究会と共催）

日時： 2003年9月20日 13:00～17:00

場所： 甲南女子大学

司会： 林 礼子（甲南女子大学）

講師： Associate Professor & Dr. Gene Lerner (University of California at Santa Barbara)

演題： Practice Does Not Make Perfect: Some Intervening Actions in the Selection of Next Speaker

データセッション： 会話分析の手法のチュートリアル

第2回講演、コンファレンス後援 (JALT 大阪支部、JALT Pragmatics SIG, the GILE SIG, the CUE SIG と共催)

1 日目

日時： 2007 年 10 月 6 日 (土) 18:00～20:00

場所： 大阪駅前第3ビル 21 階 テンプル大学ジャパン 大阪校

講師： Prof. & Dr. Janet Holmes (Victoria University of Wellington, New Zealand)

演題： Gender and Leadership: Some Socio-Pragmatic Considerations

2 日目

日時： 2007 年 10 月 7 日 (日) 10:00～18:00

場所： 関西大学 千里山キャンパス岩崎記念館

コンファレンス・タイトル： Gender and Beyond

イベント内容： 研究発表とパネルディスカッション

4. 学会誌『語用論研究』

4.1. 研究論文の分類と研究傾向

日本語用論学会の学会誌『語用論研究』は、第1号が1999年12月に発行され、第10号が2008年に発行された。1号から10号までに掲載された論文の合計は86篇である。

第1号 (1999) :	6 篇
第2号 (2000) :	9 篇
第3号 (2001) :	7 篇
第4号 (2002) :	8 篇
第5号 (2003) :	10 篇
第6号 (2004) :	9 篇
第7号 (2005) :	13 篇
第8号 (2006) :	10 篇
第9号 (2007) :	7 篇
第10号 (2008) :	7 篇

86 編の掲載論文をテーマ別に分類すると以下のようなになる (ここでいう、「ミクロ」、「マ

クロ」の区別は、Mey (1993) で用いられているように、より具体的・個別的なテーマか、より抽象的・一般的なテーマかという区別に対応するが、両者の区別はファジーである)。

ミクロ的語用論研究	1. 直示 (Deixis)	1
	2. 推意 (Implicature)	2
	3. 前提 (Presupposition)	0
	4. 言語行為 (Speech Act)	12
	5. 談話と会話分析 (Discourse and Conversational Analysis)	18
	6. 丁寧さ (Politeness)	4
マクロ的語用論研究	7. 認知語用論 (Cognitive Pragmatics)	15
	8. 異文化間語用論 (Cross-cultural Pragmatics)	1
	9. 中間言語語用論 (Interlanguage Pragmatics)	4
	10. 社会語用論 (Societal Pragmatics)	5
	11. 歴史語用論 (Historical Pragmatics)	5
	12. 関連性理論 (Relevance Theory)	12
	13. 語用論・意味論のインタフェース	16
	14. 応用語用論 (Applied Pragmatics)	3
	15. 語用論の理論 (Pragmatics Theory)	2

(注：分類によって、2つの分野にまたがっている場合がある。86篇中14篇は2つの分野にまたがっているので、累積100篇となる。)

論文の数から見れば、一般語用論研究は主に言語行為 (12) と談話と会話分析 (18) の2つの分野に集中している。マクロ的語用論研究は、主に認知語用論 (15)、関連性理論 (12)、語用論・意味論インタフェース (16) の3つの分野に集中していることがわかる。そのうち、語用論・意味論インタフェースに関する論文が最も多い。その理由として、以下の3つが考えられよう。第1に、認知言語学からの影響が強いことが挙げられる。第2に、認知言語学が意味論と語用論を分けて考えないということが挙げられる。第3に、認知言語学会と語用論学会の2つの学会の共通会員が多いということが挙げられる。論文全体から見れば、累積100篇の論文のうち、ミクロ的語用論研究は37篇で、マクロ的語用論研究は63篇で、後者のほうが多い。このことは、語用論研究の傾向が、直示、推

意、言語行為など伝統的な語用論研究から、次第に言語使用のマクロ的語用論研究へ移行していること、そして研究方法の多様化が進んでいることを物語っていると考えられる。

4.2. 海外語用論研究の紹介

海外語用論研究の紹介はほとんど全世界を網羅している。特に中国語用論研究の紹介が多いが、このことは、アジア語用論研究の相互交流の結果を反映している。海外の動向 (Current Trends of Pragmatics) は全部で 13 篇である。以下に詳細を挙げる。

第 1 号 (1999) :

- | | |
|---------------------|------|
| 1. 国際語用論会議に見る語用論の動向 | 高原 脩 |
| 2. 中国における語用論研究の概要 | 余 維 |

第 2 号 (2000) :

- | | |
|-----------------------------|-------|
| 3. フランスの語用論研究 | 東郷 雄二 |
| 4. スペイン・ラテンアメリカにおける語用論研究の概要 | 大倉美和子 |

第 3 号 (2001) :

- | | |
|------------------------|------|
| 5. ドイツにおける近年の語用論研究 | 草本 晶 |
| 6. オーストラリアにおける語用論研究の動向 | 高司正夫 |
| 7. 第 7 回中国語用論シンポジウム | 余 維 |

第 4 号 (2002) :

- | | |
|--|------|
| 8. アメリカにおける語用論研究 (1) 「カリフォルニア大学サンタバーバラ校」 | 林 宅男 |
|--|------|

第 6 号 (2004) :

- | | |
|------------------------------------|------|
| 9. 海外における語用論の動向——ポライトネスとジェンダーの研究—— | 林 宅男 |
|------------------------------------|------|

第 7 号 (2005) :

- | | |
|------------------------|------|
| 10. 『第 9 回国際語用論学会』 | 堀 素子 |
| 11. 『第 9 回中国語用論シンポジウム』 | 余 維 |

第 8 号 (2006) :

- | | |
|---|---------------|
| 12. Studies in Pragmatics in New Zealand: Victoria University of Wellington | Kazuyo Murata |
|---|---------------|

第 9 号 (2007) :

- | | |
|------------------------------------|-----|
| 13. 語用論——認知と習得：「第 10 回中国語用論シンポジウム」 | 余 維 |
|------------------------------------|-----|

4.3. 書評

書評は、以下の3篇である。

1. 第3号 (2001)

Jacob L. Mey (2001) *Pragmatics: An Introduction*

高司正夫

2. 第4号 (2002)

主編 陳治安 劉家榮 文旭 (2000) 『語用論：言語理解、社会文化と外国語教育』(第6回中国語用論シンポジウム論文集)

余 維

3. 第6号 (2004)

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句——』(ひつじ書房)

富永英夫

5. 『大会発表論文集』

5.1. 『大会発表論文集』の刊行

2005年度より、毎年の大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、『大会発表論文集』(Proceedings)を発行してきた。毎年、多くの発表者の発表論文が掲載されている。この論文集の発行によって、大会で発表された研究が多くの人に読まれ、語用論研究がますます発展することを願ってやまない。

5.2. 創刊号～第3号までに収録されている発表論文数と分類

以下に、創刊号～第3号までに収録されている発表論文数と分類を挙げる。

創刊号 (2005) 32本

研究発表 20本、ワークショップ発表 12本、ポスター発表 0本。

第2号 (2006) 46本

研究発表 19本、ワークショップ発表 19本、ポスター発表 8本。

第3号 (2007) 58本 (—10周年記念世界大会—)

研究発表 41本、ワークショップ発表 12本、ポスター発表 5本。

6. 海外語用論学会との交流など

中国海外語用論学会との交流を深め、招待を受けて、以下の中国語用論大会に参加した。

1. 第 7 回中国語用論シンポジウムへの参加

日にち： 2001 年 8 月 6 日から 8 日まで

場所： 中国蘇州大学

参加者： 小泉保日本語用論学会会長、澤田治美学会事務局長、余維学会発起人
会員が招待を受けて大会に参加した。講演と研究発表を行い、その内
容は大会論文集に掲載された。

2. 第 10 回中国語用論シンポジウムの参加

日にち： 2007 年 7 月 20 日から 23 日まで

場所： 中国南京大学

参加者： 澤田治美日本語用論学会会長、林宅男学会事務局長、林礼子事業委員
長、余維事業委員が招待を受けて大会に参加した。講演と研究発表を
行い、その内容は大会論文集に掲載された。

詳細は以下の『語用論研究』の記事を参照されたい。

第 3 号 (2001)： 「第 7 回中国語用論シンポジウム」(余 維)

第 9 号 (2007)： 「語用論——認知と習得：「第 10 回中国語用論シンポジウム」」
(余 維)

7. 終わりに

これまで、日本語用論学会の 10 年の歩みについて、様々な観点から見てきた。10 年は 1 つの区切りである。会員の中には、1998 年 12 月 5 日に開かれた第 1 回大会（於関西外国語大学）からこれまで毎年、大会に参加されてきた方もおられるであろう。こうした熱心な方々のお力添えのおかげでわが学会はここまで歩むことができた。あらためて御礼を申し上げる次第である。また、（今は亡き小泉保先生、高原脩先生をはじめ）役員として学会の立ち上げに奔走していただいた方々にも感謝の言葉を申し述べたい。継続こそ力である。わが学会は、謙虚な気持ちで過去に学び、未来に向けて力強く一步一步前進していかなければならない。



(学会発足の1998年から8年間に亘り多大の貢献をされた小泉保先生を囲んでの慰労会)

(この原稿が完成する直前に初代会長の小泉保先生が2009年12月18日、84歳でご逝去されました。先生のご冥福をお祈りするとともに、つつしんでこの原稿を先生のご霊前に捧げます。)